



報道機関各位

熊本大学

「地域経済の回復・再生・創成に向けた世界最先端観測機器による
水中環境調査事業」(熊本大学 震災復興・日本再生支援事業)について

熊本大学では、東日本大震災への対応として、被災地出身学生への支援、医師等の派遣、義援金の送付等に加え、「熊本大学 震災復興・日本再生支援事業」として大学の専門分野を活かした支援活動を実施しています。

支援事業の一つである「地域経済の回復・再生・創成に向けた世界最先端観測機器による水中環境調査事業」は、一般社団法人国立大学協会との共催で実施している事業で、世界最先端の性能を有する音響解析装置及びモニタリングロボットで地形・底質を調査し、収集した位置情報、画像及びサイドスキャンイメージに基づいて、高精度な地形・底質に関する環境評価を行い、自治体等に情報を提供することにより災害復旧、産業復興に資することを目的としています。

宮城県等から依頼を受けた本学沿岸域環境科学教育研究センター 秋元和実准教授を中心とするグループは、未調査であった東湾を含めて、気仙沼湾全域において、4月13日から4月28日にかけて海中環境を調査しました。さらに、音響装置では識別できない小型の瓦礫の分布状況を、気仙沼港において遠隔操作型ロボットで調査しました。環境評価及び瓦礫の分布特性の概要を、宮城県、気仙沼市及び宮城県漁業協同組合に提供しました。

津波によって海底が削られた場所は、西湾の奥部（気仙沼港西側）および大島瀬戸に限られます（図1）。それ以外の場所での水深の増加は、地震による地盤沈下の影響を反映しています。大型の瓦礫は、気仙沼港内、西湾中部および大島瀬戸東部に分布しています。さらに、遠隔操作型ロボットの観測で、津波で流出したと思われる小型の瓶および缶等の細かいガレキが分布していることが明らかになりました（図2）。腐食あるいは破損によって、残された化学物質による新たな環境汚染の可能性があります。7月には、瓦礫が密集している可能性が高い西湾南部を自律型環境モニタリングロボットで調査する予定です。

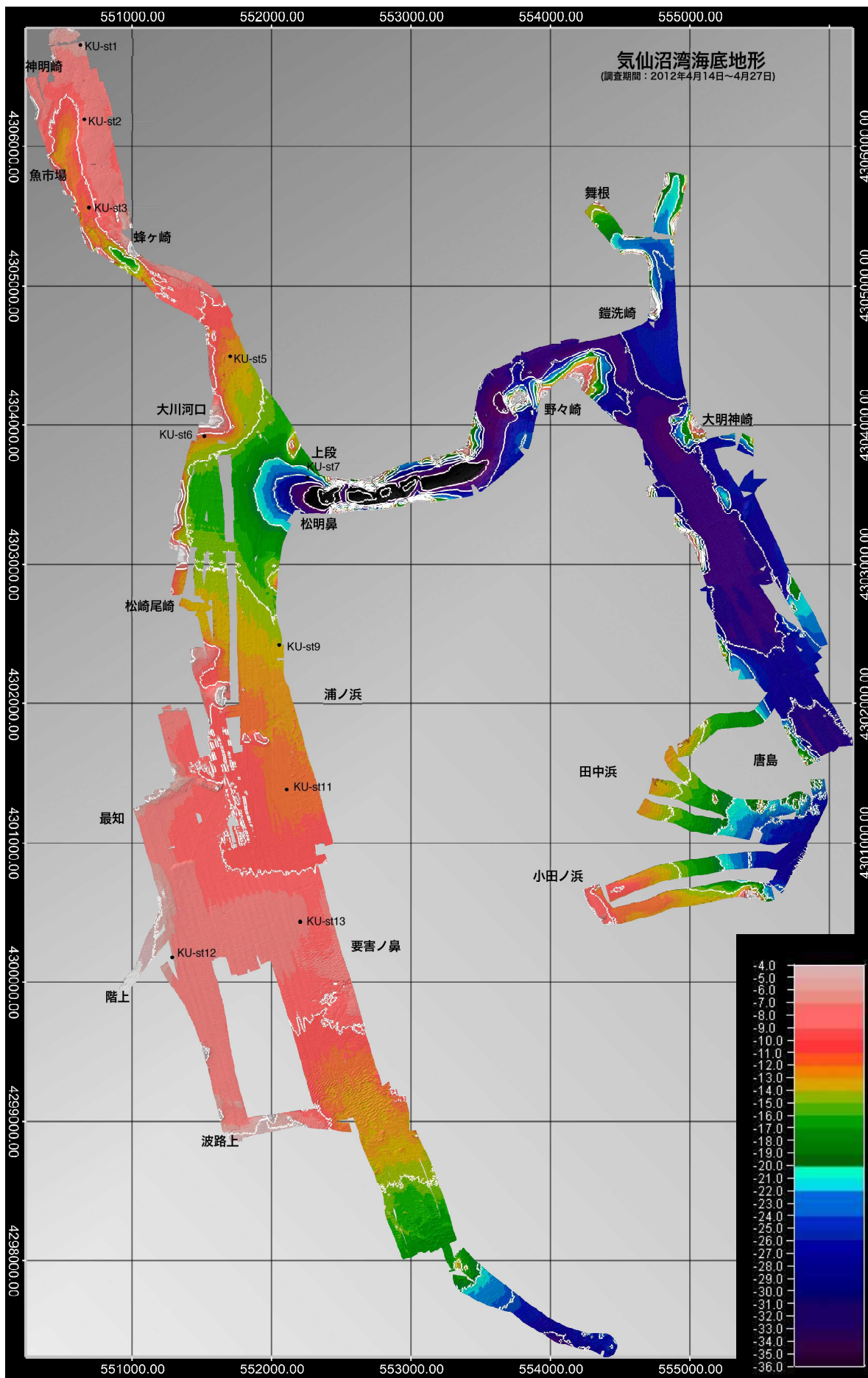


図1 音響解析装置で得られた最新の気仙沼湾の海底地形図.

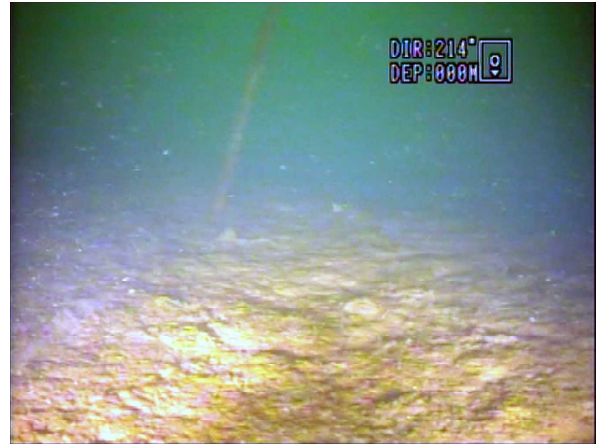
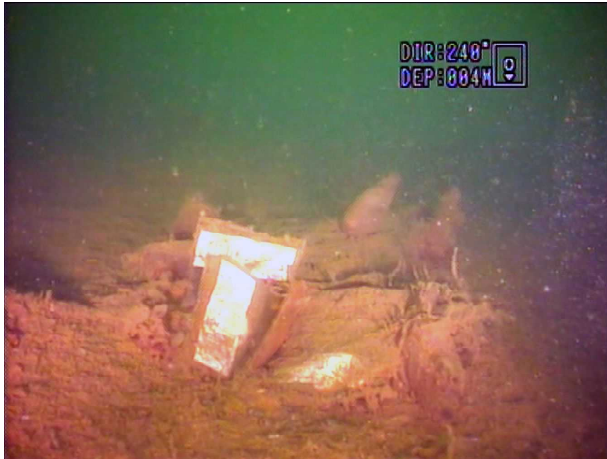


図 2 気仙沼港に残るドラム缶，瓶，パイプ等の様々な小型の瓦礫.

問い合わせ先

熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター

担当 秋元 和實 准教授 (Tel 096-342-3426)